

ため池の役割とため池百選について

担当者：江花川沿岸土地改良区
事務局長 安田勝男

農林水産省HPでは、降水量が少なく流域の大きな河川に恵まれない地域などで、農業用水を確保するために水を貯え取水ができるよう、人工的に造成された池のことです。ため池は、新田開発や用水不足解消を目的に、古代から近代にわたる長い歴史の中で築造され、現代に至っても貴重な水源とし農業の礎（いしずえ）の役割を果たしています。全国に約21万あるため池の多くは長い歴史を有し、農業用水の水源として農業の礎（いしずえ）を担うとともに、地域の文化にも深く関わり、周辺の農地や里山と一体となって多様な生物生育・生息・の場となっています。また豊かな自然環境とのふれあい・やすらぎの場・さらには環境教育の場など、多様な役割も発揮できる場であり、地域振興の核となる可能性を秘めています。

他方、農業者の減少・高齢化に伴い、従来のようなため池の維持管理が難しくなり、防災面での脆弱化や多様な役割の発揮が困難になることも懸念されています。

このため、ため池百選を選定し、地域にとっての資源であるため池が、地域活性化の核として保全・活用される取り組みの機運を醸成するとともに、ため池の有する多様な役割と保全の必要性について国民の皆様のご理解とご協力を頂くための契機といたします。

藤沼湖について

藤沼湖は、福島県中通り地方に位置し須賀川市の西にあります。

この地方は、江戸時代のおわりころ、江花川堰をめぐる堀込村と、矢田野村の二つの村が争い、村の代表である庄屋どうしが話あっても解決しなかったため、最後は代官所が判断して、水が流れるようになったということがあったそうです。このような、水がたりないことによる日照りの被害は、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代にも、発生していました。人々は「なんとかならないものか」と考えていました。榊衝村の池田利一もその一人でした、利一は江戸時代の安政元年（1854）現在の榊衝堀込字内屋敷に誕生しました、おさないころから、水の大切さを体におぼえていました。そこで、たびたびおこる水不足を考えていました、多くの人々も同じ考えでした、大正時代のころ、大きなため池を作ろうと話し合いがあったようですが、実を結びませんでした。

昭和9年江花川の水を利用している田、ため池の水を利用している田、に日照りによる被害が発生しました、利一は80歳になっていました。

利一、人々は、長沼町の町長さん、梓衝村の村長さん、稲田村の村長さんをお願いしようと考え、利一をはじめ人々が考えた大きなため池づくりが実現することになったのです。

この事業は、昭和10年に調査が行われまして、昭和12年より昭和24年まで13年間かかり完成したのです。(周囲3Km・面積20ha・水深15m・灌漑面積865ha・貯水量170万㎡) 利一は、昭和19年11月8日貯水池藤沼用水の完成をみないで、この世を去りました。藤沼湖はこのような先人達の努力によって現在にいたっています。

藤沼湖の役割は、灌漑用水が主ですが、周辺は、昭和63年から平成8年にかけて80haの公園整備が図られて、春には沿岸の桜・夏にはヤマユリなど季節の花が咲きほこり、秋には紅葉が湖面を美しく染めて、冬には藤沼温泉「やまゆり荘」で体を温めてくつろぎ、年間を通して須賀川市民のいこいの場になっていて、年間10万人の観光客が訪れています。

現在までの藤沼湖の維持管理について

昭和10年調査して、昭和12年より工事が始まり、国・県・長沼町・梓衝村・稲田村・が工事費用を負担しました。昭和14年ごろになると全国で食糧不足がおきています、戦争中でしたので働く人、材料など物がたりなくて工事はなかなか進みませんでした、現在のような機械もありませんでしたので、人の力によって工事は進められました。各農家からも須賀川・岩瀬地区の学校の生徒も、工事に協力頂きました。工事開始以来13年目に藤沼湖は完成致しました。

主な改修工事は、昭和48年・昭和52年～昭和54年・昭和57年～平成7年・平成19年～平成21年にかけて改修が行われております。